

哲学研究

第四百九十七号

第四十三卷
第三册

哲学的知識の問題

ジョン・D・ゴーチン

野田 又 夫 訳

哲学的知識の問題というこの大きな難かしい問題を論ずることは長い秩序立った取り扱いを必要とする。今日すくなくとも英米哲学においてはこの問題について互に著しく違った見解が真面目に提出せられ理由づけられている、という事実によって問題はさらに難かしくなっている。もちろん、ずっと不変に保たれて来た或る種の伝統的な見地はあった。とくにアリストテレス・トマスの哲学がそれである。しかしながらこの伝統はたいいの場合、実証主義、プラグマチズム、言語分析、現象学などの諸運動によって、またこれら運動のどれとも容易に同一視できない若干の個々の哲学者の哲学についての考え方などによって、惹き起こされた思想の激動からは離れたところにいたのである。いずれにしても状況は複雑であり、これが今後それほど複雑でなくなるだろうと考えさせるような、いかなる理由も存在せぬと思われる。哲学の問題というものには、こういう状態を必至ならしめる何ものかがあるのかもしれない。

哲学的知識の問題は過去の歴史においても現代においても方法の見地から採り上げられて来た。すなわち、物を知る方法は知られるものから切り離されることが出来、そしてそのように独立にとり出されると、知識のあらゆる形態

にひろく適用出来、もちろん特に哲学にも適用出来る、と前提された。歴史を見ると、デカルトはそういう採り上げ方を持ち出した哲学者のすぐれた一例である。そしてこのデカルトの影響が西洋哲学においてずっと作用し続けていることは著しい事実である。方法に対するモデルは時には数学であったし時には経験科学であった。いずれの場合にも前提は同一であった。すなわち、これらの学問には一つのはっきりした方法が根底にあり、それをとり出してあらゆる領域に適用しうる、という前提である。どれかの領域においてすでに真理を生み出し得た方法は、どの領域に適用されても同様に正しい観念を生み出しうるであろう。これはたしかにわれわれを元気づけ、われわれの興味をそそる考えである。しかも、そのモデルが数学である場合でも経験科学である場合でも、近世においてはこの考えは、それら科学の異常な進歩という威信を背後にもっていた。『純粹な』方法がこれらの科学から取り出されうるという信念は、根本的な意識的な前提であったように思われる。しかしその前提が科学とその影響力との異常な発展に促がされて採られた態度であったということは、それほど意識的であったようにには思われない。しかしそれは哲学的知識のこの方法的取り扱いに向った近代思想の多くのものの背景に存した一条件であることは明らかである。こういう種類の極めて深い歴史的社会的影響は、哲学的知識の問題に対する一つの重要な手懸りであって、哲学そのものには外的な条件だとして、全く無視されたり簡単に片づけられたりすることは出来ない。ヘーゲルやマルクスの弁証法の一つ正当性は哲学的思惟におけるこの要因に密接に関係している。

しかしながら、われわれは、方法が数学的モデルによって描かれるにせよ経験的モデルによって描かれるにせよ、一つの『純粹な』方法を意識的に前提すること、の方へわれわれの注意を向けねばならぬ。再びデカルトと西洋思想に対するかれの大きな影響とをかえりみると、数学的モデルが哲学的知識への導きとしてあのように重要な意味をもって現われたことはむしろ驚くべきである。それは、骨だけの形にして云えば、まず不可疑の真理を選び出し、次にかくして選ばれた諸前提からさまざまな論理的帰結をひき出すこと、を提案している。しかし方法としてはそれは

不可疑の真理への導きを与えてはいなかったものであり、しかも、まさに不可疑の真理を選ぶことが何よりも大切だったのである。純粹な方法の前提である不可疑な真理の選択ということは方法そのものと何のかかわりも持っていないように見える。それら不可疑の真理は、特殊な議論に基づいて居り、これらの議論はそれ自身としては面白いものだが、しかし数学的モデルからは全く独立したものである、と私は云いたい。例を挙げれば、デカルトの哲学の重点は、『方法序説』にあるよりはむしろ『省察』のうちにあるのである。しかしながら、論理的乃至数学的モデルを重視することは或る重要な目的には役立った。すなわちそれは、或る前提を許せば或る一定の帰結が必然的に承認されねばならぬという事実を生き生きと浮き立たせたのであり、デカルトの哲学は多くの例についてこの真理を明示している。しかし方法のこの働きは如何なる前提をも与えたのではなく、如何なる内容的哲学的真理を与えたのでもなかったのである。上述の二次的な価値以外には、数学の中で哲学のためのモデルを見出そうとする試みは、何の結果をも生まなかった。もっとも十九世紀の末にフレーゲその他によってなされた新たな仕事は例外であるように思われるかも知れない。けれどもこれは、重要ではあったが、ここで論じているのとは違った種類の発展だったのである。

哲学的知識の問題を経験科学に基いた方法論的モデルによって扱おうとする大きな努力もまたなされて来た。その近代的形式だけを採り上げるとしても、十八世紀以来の長いかつ次第に複雑さを増した歴史がある。その試みのすべての形においては云えないがその或るものにおいては、一つの方法が経験科学から取り出されることが出来、一旦取り出されるとその方法は哲学を含めあらゆる学問にひろく適用されうるといふ信念があった。ある哲学者、たとえばアメリカのデューイは、科学の方法を哲学に適用することによって新たな『科学的哲学』が生れるであろうと信じた。こういうやり方の基準となっている考えは、観察が、与えられた理論の有利な証拠になるか不利な証拠になるような場合における、理論とそれにとって有意味な観察との関係、を採り上げること、であった。過去百年の間の経験科学の圧倒的な成功はそれだけで、こういう考察を大切に思わせるに充分な力であった。この中心的な観念の分析

に近年の英米哲学において捧げられた努力と能力は莫大なものである。

よく知られているように、科学的方法に対するこの関心の主要な表現は最近では、ウィーン学団によって示された。科学的モデルを定式化し、そうすることによりそれを独立に取り出そうとする、この努力の展開において、事実上何が起こったかを注意することは、そういう努力がどういふものであるかを知るために有益である。この運動が哲学一般に対する不満から出発したことは明らかである。そして、それは経験諸科学に共通な方法を見出そうと望んだことは確かである。ウィーン学団に属する或る人々（その一例はシュリックであろう）にとっては、科学的方法に対する関心は、われわれがすでに述べた一般的な考え方、すなわち方法を一旦独立に取り出せばそれを哲学にも適用し、科学的哲学を産み出すことが出来るという考えから、生じた。しかしこの運動を全体として見ると、或はすくなくともそのもっとも有力な表現について見ると、哲学に関しては全く予期に反した或る事が結果として現われたのである。それを簡単に述べるとすれば次のようなことである。すなわち、科学的方法は諸科学自身を越えて適用され得ない、ということである。科学的方法が独立して取り出された場合、さまざまな科学の扱う事実以外にそれを適用すべきものは何も見出されない。もちろん科学の方法についての諸々の主張というものはあるが、これらは知識そのものではなく知識についての主張であるに過ぎない。言い換えれば、科学的方法を独立に取り出すことによって、内容的な哲学的主張そのものは存在せぬということが示されたように見える。従って、存在に関する内容的主張という意味での科学的哲学を、産み出そうとする希望は、誤まった希望であったのである。

このウィーン学団の考えの背後にある論理は力強いものであり、それは哲学に対する衝撃としての役を果たした。それは哲学がしばしば非常に必要とするような刺激であった、ところで論理実証主義は、科学的知識の理解のためのその積極的寄与を別にしていえば、科学的モデルが、その適用において、内容的な意味な主張すなわち『認識的意味』をもつ主張の領域を規定するのだという、興味ある結論に到達した。然しまさにこの点に言い過ぎがあるのであ

る。というのは上の理論全体を、存在についての内容的主張を含まない、『純粋な』メタ言語で言い表わすことは——こう言ってもよいと思うが——不可能であると判明したからである。その理論を述べるのに必要な意味ある概念の例として『対象』(object)、『出来事』(event)、『言語的存在』(extra-linguistic entity)が挙げられるであろう。

哲学を数学のモデルによって造り直し得るということを示そうとする努力は、価値ある努力ではあったが、成功しなかった。そして最近経験的モデルのうちに哲学の方法を見出そうという努力は、科学的モデルが、厳格に言えば、科学的事実に対してのみ適用可能であるということを示した。しかしこの二つのやり方は人間の知識の一部門を取り上げてその方法を記述するという共通点を持っている。数学における顕著な成功、また経験科学では例えば物理学における顕著な成功が、明らかにこういうやり方を促がすのであり、すくなくとも或る程度はこういうやり方に根拠を与えるのである。しかしながらまた同じ根拠によって『柔かい』(それ程精密でない)科学或いは歴史或いは哲学自身さえ選んでよいはずである。わたくしが判断しうるかぎり、この選択に一つの方向を与え得るような、始めから決まった原理というものは存在しない。もちろん現実に行なわれる選択に対しては社会学的歴史的其他の理由が確に存在するが、それらは偶然的な事情に過ぎない。わたくしの考えでは英米世界での最近の哲学において、哲学の方法の探究のためのもっともよい拠り所は哲学そのものであるということについての充分な理解から多くのものが生まれている。こういうやり方には秩序立った簡単な方式などはもちろん何も無い。けれどもたとえば哲学史の研究は、過去において哲学者は有意義な主張をなしており、かれらの反省のうちには方法の基本は含まれている、という前提に基づかないならば、全く哲学的基礎を欠くことになると思ふ。

このように哲学が自己自身の方法をきめるものと考えらるならわれわれは改めて哲学者自身に向かわねばならないことになる。特に方法の問題を意識し数学と高度に発達した経験科学とのいずれにも通じていた近代哲学者達の間で、二十世紀ではラッセルが際立っている。ラッセルは哲学者としての自分の長い経歴を回顧して次のように書いている。

『一元論を捨てて以来のわたくしの哲学の発展を通じて、わたくしはいろいろな変化を経験したにも拘らず或る根本的な信念をずっと持ち続けて来た。それをわたくしはどうして証明すべきかを知らぬが自分には疑おうとしても疑えないのである。それら信念の第一のものは、それに反対する意見が主張されたという事情がなかったならばそれをわざわざ述べるのが恥しいほど明白だと思われるものであるが、「真理」が「事実」に対する或る種の關係に依存するということである。第二の信念は、世界が相互關係にある多くのものから成っているということである。第三の信念は「文章法」——即ち文章の構造——が、事実の構造に対する或る關係をもつに違いないということである。ともかくも言語一般が持たざるを得ず、どれかの國語に特有なものではないような、文章法の側面に関しては、そうであるということである。最後に上述の三つの信念ほど確かだとは感じないが何か非常に有力な考慮がわたくしをしてそれを捨てしめるのでなければどこまでも持ち続けたいと思っている原理がある。それは、一つの複合体について述べようことは、その複合体の名を挙げることなしにその複合体の諸部分とそれらの相互關係だけを述べることによって、述べよう、という原理である。』(『私の哲学の發展』一五七—一五八頁)

わたくしがこの一節を選んだのはラッセルが全体としてすぐれた哲学者であるためばかりでなくまたかれが特に極めて批判的な良心的な哲学者であるからである。上の一節はいくつかの点で注目に値する。かれはまず『私が疑おうとしても疑い得ない』三つの命題を述べている。確かにここにはデカルト的なひびきがある。しかしデカルトとの相似は、むしろデカルトの哲学の非数学的な側面への相似である。ラッセルの前提の第一のものすなわち真理は事実への或る關係をもつという前提は、それが時々否定されたことがある故にのみかれの挙げるところとなったが、かれはそれを述べるのを『恥ずかしい』と感じた。ラッセルのプラグマリズムや実証主義に対する周知の反論がこの時かれの心にあつたのである。恐らくこの第一の前提は極めて根本的なものであろうから、かれがたとえばデューイの真理の理論を批評する際にとつた方法を注目するのがよいであらう。ラッセルは真理に関するかれ自身の考えの否定が何

を意味するかを理解し得ないと言うのではない。事実ラッセルはデューイの主張を極めて適切に述べているのである。しかしラッセルの信ずるところ（そしてたしかにデューイの主張の多くはそういう結論にいたるのだが）、デューイの見解によれば、『真理』が関係を持ちうる『事実』は厳密に云えば存在しないのである。そこでラッセルは結論する、これは『馬鹿げている』と。

『馬鹿げている』とは強い言葉である。しかし上に云ったように、それは『無意味だ』ということの意味しない。その意味するところはむしろデューイの見解がラッセル自身の信念と相反するということである。その信念は、必要とあれば、力強く支持することが出来、またラッセルがいくら骨を折って指摘しているように、科学と常識とのいずれによっても現実に支持されているものである。ラッセルは、それほど有力な根拠をもちそれほど広く支持されていることがらを、わざわざ根拠づけねばならぬことに困惑している。（周知のようにラッセルは哲学の中で度々冗談を云うが、それはこういう哲学的困惑に密接な関係を持っているのであろう）。ラッセルはまた『世界が相互関係にある多くのものからなっている』というかれの第二の想定に関しても同じ理由によって困惑を感ずることであろうとわたくしは思う。

これら二つの信念は哲学的思惟の一つの源から取られた適切な例である。われわれの思惟と行動の基本構造のうちに極めて深く根差している相当多くの数の信念があり、それらが否定される場合においてのみ、われわれはそれらに特に意識し、それらを説明し理由づけようと企てる。そこでそれらの信念は哲学又は形而上学を生むこととなるのである。帰納法の原理に対するヒュームの疑いは上に挙げたような種類の極めて基本的な前提の否定であった、とわたくしには思われる。そして哲学の研究者ならばだれでもこの原理をヒュームの懐疑的分析から救うことが如何に困難であるかを知っている。たとえば『純粹理性批判』のなしたところはそれであった。

ラッセルの述べているような信念は平凡で陳腐であるかも知れないが、それら信念の批評すなわち理由を持つた否

定および理由をもつた肯定は、決して平凡でないことがわかるのである。たとえば『事実』という何気ない言葉をとってみよう。この言葉の意味を明らかにすることは、ラッセルの書物を少しでも読めば分るように、哲学の大変重要な仕事なのである。実際ラッセルの初期の思想はこの問題を中心としていたのであり、ラッセルは、自分が『事実』を『基本的信念』として守りつづけたと云っているにも拘らず、時には『事実』の概念を捨てようと思つたことがあつた、と思われる。

デカルトは、われわれがそのような基本的信念を『方法的懐疑』によつてつきとめうる、という興味ある考えを持つた。しかしいろいろな信念をひとりて吟味してその中から不可疑の信念をとり出すということは、いくらかの価値は持つてあろうが、余り有効な企てではない、とわたくしには思われる。前に云つたように哲学の初めに置かれる信念のいくつかはわれわれの思惟と行動の根底をなしている。ラッセルは、しばしば無意識の信念というものがある、という見解を主張したが、これは、わたくしには正しいと思われる。おそらくラッセルは上に挙げた二つの信念をもともとも無意識の種類のもつと考へるであろう。このような信念を意識の明るい光の中へ引き出すことは、意識的な探究の任ではおそらくないのであろう。われわれの無意識の信念に対する洞察を与えるものは、むしろ、或る時或る場所での偶然的な事情であり、個人の意識的信念に対しては外的な何物かである。哲学の歴史そのものにおいても——しかもこの点こそ哲学の歴史が絶えず興味を惹く理由の一つなのであるが——幾人かの天才がいて、われわれの基本的諸信念をはっきり否定あるいは肯定することにより、われわれにそれら信念を意識させてくれるのである。そしてこの場合屢々否定は肯定よりも哲学的に強い刺激を与える。

ストローソンは（彼の著『個体』において）、諸々の信念の中心的な『核』というものがありそれが哲学の探究すべき領域である、と最近主張した。かれの意味するところは、上にラッセルから取つた例が示すようないくつかの基本的信念であるように思われる。それらは不変であるとストローソンは考へているようである。そしてこの『核』が

人間の思惟と行動との根底に横たわる信念の内にある、ということにかれもおそらく同意するであろう。しかしこれらの信念の何か中心的な『核』がある、ということをはっきりつきとめることは困難である。けれどもこれは何も新しい主張ではないのである。何故ならG・E・ムーアが既に今世紀の始めに、そういう中心的な核を『われわれの誰かが真だと知っていること』として確定しようと努めたからである。ムーアはまたこのような普遍的な性格を持った若干の周辺の信念をも認めた。勿論ムーアは中心的な核を選ぶのに広汎な且つ細かい点に立ち入った議論を行った。というのは中心的核とはわれ等すべての信ずるところであると主張するだけでは、殆んど同語反覆を出でないからである。もちろん信念のそのような中心核が確であると人々は始めから信じたくなるであろう。しかしいざれにしても、それが見出される唯一の道は（私の知る限りでは）、ムーアがこの問題について辿った道なのである。

われわれが表現しうる限りのわれわれの基本的観念を吟味することは哲学の一つの重要な源泉ではあるが、唯一の源泉だと考えられてはならぬと、わたくしは思う。たとえば他の源泉をもう一つだけ挙げるとすれば、哲学者達は時に、或る異常な信念のために『議論を構える』。かれらはそれを証明するのではない（これはワイスマンの論じた通りである）。しかしかれらは一つの信念を、普通とは違った新たな考え方の中に移し入れることに成功することがあるのである。しかしながらこのような哲学的努力はやはり他の諸信念を使用しなければならぬ。すなはち、異常な思弁的な信念を理解するのに必要な、多少とも共通にいだかれていた信念を使用しなければならぬのである。対象が『感覚所与』の集合である、という信念は、一つの異常な信念の例として挙げられるであろう。しかしこの信念は、ともかくも理解されるためには、『対象』についてのもとからある考えに幾分でも関係づけられることが必要なのである。感覚所与の学説の歴史は、或る異常な信念の例として挙げられるであろう。しかしこの信念は、ともかくも理解されるためには、『対象』についてのもとからある考え方に幾分でも関係づけられることが必要なのである。感覚所与の学説の歴史は、或る異常な信念を支持するために議論が構えられるさま、を極めてよく例示している。この信

念は明らかに証明、されてはいない。ただその信念を支持するところの幾つかのよき理由があるだけであり、それらの理由はまた、その信念を排除する理由と注意深くつき合わされねばならないのである。

異常な信念にとって当てはまることは、上述のもっと基本的な信念を支持し或いは否定する議論についても、或る程度あてはまることである。これら基本的信念といえども、決定的に証明されたり決定的に否定されたりすることは出来ない。これらの信念は、よき議論によって強められまたよき議論によって弱められうる。さらにまた一つの信念がそれを支持するよき議論とそれに反対するよき議論との間にいわば宙ぶらりんになっているような、特別な場合もある。このような場合たいてい合理的な選択または決定を生むに十分な重みがどちらかの方向に働くものである。すると問題はその特定の人にとっては、すくなくともしばらくは落着する。しかし新たにそれを揺がすような議論がいつでも現われうるのである。哲学的探究の弁証法には終りというものはない。

上のような形式張らぬ議論は、それを正確にし充分に理由づけるには更に長い時間を必要とするような、哲学の一つの考え方を、暗示しようとしただけである。たとえばわたくしはラッセルの挙げた基本的な信念のうち二つを採り上げただけであった。しかし他の二つは哲学の仕事が何であることを示すのに更に一層興味あるものであるかも知れない。

(了)

(筆者) スタンフォード大学〔哲学〕教授・京都大学客員教授
(訳者) 京都大学文学部〔哲学〕教授